

ブリクセン文学にみる食の風景
『バベットの晩餐会』の中の「口」が表象するもの

デンマーク語専攻 飯村優生

目次

1. はじめに
 - 1.1. 本論文の意義, 研究目的
 - 1.2. 問題設定
 - 1.3. 各節の内容の概説, 研究方法
 2. 作品紹介
 - 2.1. 作者紹介
 - 2.2. 作品概説
 - 2.2.1. 登場人物紹介
 - 2.2.2. あらすじ
 3. 作品分析, 登場人物それぞれにとっての「口」
 - 3.1. 食べる「口」
 - 3.1.1. マチーナ, フィリッパと兄弟姉妹
 - 3.1.2. レーベンイエルク
 - 3.1.3. バベット
 - 3.2. 歌う「口」
 - 3.2.1. フィリッパ
 - 3.2.2. アシーユ
 - 3.3. 祈る「口」
 - 3.3.1. マチーナと兄弟姉妹たち
 - 3.3.2. フィリッパ
 - 3.3.3. レーベンイエルク
 - 3.3.4. バベット
 4. 前章を踏まえたうえで「口」が表象するものとは
 5. まとめ
- 使用テキスト
参考文献
インターネット上の資料

要約

本論は Karen Blixen の『バベットの晩餐会』において「口が表象するものは一体何か?」という問いを通して、長年にわたり愛されてきたこの作品の新たな魅力を探るものである。作品中では「食べる」や「歌う」、「祈る」といった口を使った動作が重要なシーンで何度も行われる。これらの動作の共通項である「口」という部位に着目し、その働きの分析を通して作品の理解を深めることを目的としている。

第一章では導入として研究目的や各章の概説について触れた。続く第二章では作者紹介と登場人物紹介、あらすじを交えて『バベットの晩餐会』の作品紹介を行った。第三章から本論に入り、「口」を使った動作に関連する語を通して登場人物たちの心理がどのように変化していくのか分析した。分析に際してこの作品では登場人物ごとにシンボルとなる行為が明確になっていると考えられたため、「口」の用途をその行為である「食べる」、「歌う」、「祈る」に分け、登場人物ごとに分析を進めた。

この小説では「食べる」という行為を通して登場人物たちの人生観というものが一転し、それはバベットが晩餐会を催す最後の場面に描かれている。ただその変化は一様ではなく、登場人物それぞれによって異なっていた。プロテスタントにとっては許されざる贅沢な食事であり、芸術家であるバベットにとっては自らの才能を最大限に発揮するための場であった。ここでバベットが開いた「食べる」場は栄養を摂取するだけの場にとどまらず、その才能で参加者たちを心身ともに満たした、という点に注目したい。味覚がないように振舞う参加者たちの心が満たされたことから、芸術家が才能を最大限に振るう時、その手段は意識されずとも人を幸福にすることができることがわかる。

「歌う」という面もまた、バベットにとっての料理同様、芸術家の叫びという一面を持っている。アシーユという芸術家にとって、歌や発声は愛を伝えるという本能的な役割を果たすためのものであり、彼は「歌う」ことを通して自らの思いをフィリッパに伝えた。一方、今までフィリッパにとっては歌、すなわち声は神を賛美するためだけの精神的な機能を果たすためのものであり、アシーユによって今までフィリッパが抱いてきた価値観が一転する。ここで重要なのは「歌う」ということは賛美歌に代表される精神的支柱としての役割と、自らを表現するという本能的な欲求を消化するための役割という二面性を持った行為であると示されている点である。この二面性の狭間で葛藤するフィリッパの様子から、彼女も「歌う」ことで自らを表現することを願う「芸術家」であることが分かった。

また、この作品には終始一貫してプロテスタントたちの神への強い信仰心が描かれている。彼らにとって監督牧師や神、ひいては宗教というものが大きな存在であり「祈る」=精神的支柱であると考えられる。ただ芸術家であるバベットにとっての「祈り」は心の叫びそのものであり自分の欲望であった。フィリッパ同様バベットにとって「祈り」と「歌う」ことは表裏一体であり、ここから芸術家たちにとって精神と肉体は別の物ではなく相互に刺激し合うものであることがわかった。

第四章では前章を踏まえ「口」という部位が表象するものについて述べた。本

来「口」とは生命活動を持続するためのものであるが、この作品の中での「口」はもっと多くの、複雑な意味があると考えられる。「口」を使って行われる「食べる」、「歌う」、「祈る」という動作は、今まで述べてきた通り精神的な支えや肉体的な充足といった、人間の感情や価値観に働きかけることのできる力を持っており、その場合「口」の持つ意味はただの口腔器官ではなく心や人生を豊かにするための最も根源的なもの、その幸福感や充足を生み出すものである。

また「食べる」、「歌う」、「祈る」という三つの行為が相関関係を持っていることも分かった。「食べる」と「歌う」、「祈る」と「歌う」にはそれぞれ共通する要素があり、それでいて「食べる」と「祈る」は互いに相いれない。しかしどちらか片方だけで満足することは難しいことで、お互いに補填しあって人は真の喜びを得ることができるのだ。芸術家であるバベットはこの精神的支柱としての「祈る」、それに相対する「食べる」という二つの要素の融合を可能にした。彼女の催した晩餐会は精神と肉体の垣根を超え、物語最後には心身ともに満たされた参加者の様子が生き生きと描かれる。これは奇跡を起こすことができる芸術家によって、世界が新しく作り替えられたからだと言っても過言ではない。この作品では芸術家の叫びを受け止める場として「食べる」に代表される晩餐会が用いられている。